

戦前期の樺太からみた日本人の外地における都市の建設活動に関する研究

Japanese urban foundation process in the area under the Japanese mandate before World War II from the view point of Sakhalin (Karafuto)

熊本県立大学 教授 辻原 万規彦

(研究計画ないし研究手法の概略)

本研究の目的は、戦前期の樺太(現在のロシア連邦サハリン州を構成するサハリン島(樺太島)の北緯 50 度以南の地域、南樺太)の諸都市を対象として、これまで見出されていなかった大縮尺の詳細な都市地図を多数用いて、日本人によってほとんどゼロから都市が建設された過程とその後の変容を明らかにしようとするものである。

戦前期に日本の統治下にあった地域での都市の建設過程を検討することは、当時の日本の海外進出の意味を検討する上で重要な観点であり、意義のあることである。日本国内における都市よりも計画的に建設されたとされる満洲の諸都市でも、日本人が進出する前には既に何らかの市街地が形成されていた。しかし、樺太の場合は原野であったか、もしくは小さな集落があった程度であり、日本人による都市建設の関与の割合が格段に大きい。したがって、樺太の諸都市を対象とすれば、戦前期に日本人がいわゆる「外地」で如何に都市を建設しようとしたのかを、より明確に把握できると考えたからである。

具体的には、以下の3点の実施を計画した。

1) 北海道立文書館所蔵の樺太庁文書所収の地図と建築図面の整理とデジタル化

本研究では、北海道立文書館に所蔵されている樺太庁文書に含まれる各種の都市地図と建築物に関する図面に着目した。

これは、以下の理由による。これまで、戦前期の樺太の大縮尺都市地図はほとんど見出されておらず、管見の限り、地理学分野でもその全容をまとめた成果は確認できなかった。また、樺太庁文書に含まれる都市地図についても、奈良大学の三木理史教授にその存在をご教示いただいていたが、具体的な内容は不明であった。一方、建築図面については、戦前期の樺太における建築物とその残存状況に関する研究成果を蓄積してきた北海道大学の角幸博名誉教授らのグループでも、同時代の図面をほとんど見出していなかった。また、樺太庁文書に含まれる建築図面についても、その一部を井潤裕が北海道大学での博士論文などで取り上げていたが、全容は不明であった。

2) 現地調査による確認作業

本研究では、次の2点に着目して、ロシア連邦サハリン州での現地調査を計画した。

まず、戦前期に作成された大縮尺都市地図と現況との詳細な比較である。樺太庁文書に含まれる都市地図を含め、これまで入手できた大縮尺都市地図を携え、時間の許す限り、現地調査で現状の確認と比較を進めることを考えた。

次に、戦前期に建設された樺太庁の新庁舎である。樺太庁は戦前期の樺太における行政機関であり、その新庁舎は最も重要な建築物の一つといえるが、建設過程も含めてこれまで詳細が明らかにされていなかった。しかし、事前の調査で、北海道立文書館所蔵の樺太

庁文書に図面を含む書類を見出すことができたので、これらの書類と図面を整理した上で、さらに図面を携えて現地で詳細に比較検討する必要があると考えた。

3) 戦前期の樺太における諸都市の建設過程のその後の変容に関する検討

1) と 2) で収集した図面、地図、書類、各種情報を基に、戦前期の樺太における三大都市であった豊原、大泊、真岡のほか、支庁が設置された地方の中小都市も対象に、日本人による都市の建設過程とその後の変容を詳細に検討することを考えた。

(実験調査によって得られた新しい知見)

実際の研究の実施にあたっては、必ずしも当初の計画通りに進めることができたわけではなく、また研究の進展と共に、新たな調査が必要になった点もある。それらを含めて、本研究で得られた主な成果は、以下の通りである。

1) 北海道立文書館所蔵の樺太庁文書の位置づけの再検討

北海道立文書館所蔵の樺太庁文書は、樺太庁東京事務所が保管していた文書群である¹⁾。この文書群は、「敗戦後、外務省所管のもとに樺太庁残務整理事務所、さらにはアジア局外地整理室に引継がれ、昭和 41 年に北海道に移管された」¹⁾。また、その内容は、「樺太庁が大蔵省・内務省・拓務省など中央の各省や議会関係との応接の過程で作成されたもので予算接渉(ママ)、また決算報告などが主体である。現存するものは簿冊総数 320 冊、年次としては大正 12 年から昭和 20 年にわたる」¹⁾。

北海道立文書館所蔵の樺太庁文書は、樺太を対象とした研究を進める上で、貴重な史料と考えられる。しかし、管見の限り、同館所蔵の樺太庁文書を網羅的に用いてなされた研究は、建築史以外の歴史的な研究全般を通じてほとんどみられない。

後述のように、樺太庁本庁庁舎は昭和 17 年の火災によって焼失した。火災の際、重要書類は持ち出したとされ、樺太庁文書課の書庫も焼失を免れているが、文書課の部屋そのものは焼失しており、焼失した公文書も多いと考えられる。「終戦による混乱で、樺太庁の公文書綴はまったく本土に移送できなかった」²⁾との指摘や敗戦前後に公文書を廃棄したとの指摘³⁾もある。井澗によれば、サハリン州公文書館でも通信課の文書を除いて樺太庁の公文書の所蔵は多くはない⁴⁾。したがって、今後新たに樺太庁の公文書が多量に見出される可能性は少ないと考えられ、北海道立文書館所蔵の樺太庁文書の重要性を再認識できた。

2) 北海道立文書館所蔵の樺太庁文書所収の地図と建築図面の整理とデジタル化

2019 年 5 月 15 日、6 月 27 日、7 月 25 日と 26 日ならびに 7 月 31 日と 8 月 1 日に、北海道立文書館を訪問して樺太庁文書を閲覧すると共に、地図と建築物に関する図面を整理した。また、地図と建築図面に関連する文書を、デジタルカメラで撮影した。これらの文書は、地図と建築図面の詳細を検討するための参考資料でもある。

また、建築物に関する図面 55 葉、土木構造物に関する図面 2 葉ならびに都市地図 41 面をスキャンして、デジタル化する作業を並行して行った。ただし、樺太庁文書の簿冊の持ち出しと解綴が認められなかったため、一部の図面のデジタルデータには歪みがある。また、略図に近い図面や地図の一部と写真類については、筆者らがデジタルカメラで撮影した。このうち、建築物と土木構造物に関する図面の一覧を表 1 に示す。

さらに、これらのデータを北海道立文書館と共有できた。なお、当初考えていたこれらのデータの公開については、北海道立文書館と打ち合わせはできたものの、現時点では実

現するに至っておらず、今後の課題である。

樺太庁文書の閲覧の際には、文書群の劣化が進んでいることを確認した。そのため、本研究での作業を通じて得られたデジタルデータは、史料が劣化した際の備えとして非常に重要である。これらのデータは、本研究で得られた新しい知見ではないものの、本研究で得られた重要な成果であると考えられる。

なお、北海道立文書館のほかに、北海道大学附属図書館、防衛省防衛研究所資料閲覧室、北海道道立図書館、国立国会図書館なども訪問し、資料や地図を収集できた。

表1 デジタル化できた樺太庁文書所収の図面類一覧（全て北海道立文書館所蔵）

番号	図面タイトル	縮尺	図面の内容や作者など
A 9 / 15 歳出予算資料(二) 昭和十年度／樺太庁／1933～34(昭和8～9)年			
1	拓殖学校本館計画図	記載なし	式階平面図/老階平面図、「昭和拾年度実施予定」範囲図示
2	博物館計画図	記載なし	老階平面図/式階平面図/地下室平面図、「昭和拾年度実施予定」範囲図示
3	樺太招魂社御造営之圖		透視圖/配置圖 (1/600)/側面圖 (1/100)/平面圖 (1/100)
A 9 / 18 予算資料(一) 昭和十一年度／樺太庁／1935(昭和10)年			
4	豊原警察署廳舎新築平面圖	1/300	地階平面図/老階平面図/貳階平面図/塔屋平面圖【略図に近い】
5	〔敷香支庁〕支廳計画平面圖	1/300	式階平面図/老階平面図/地下室平面圖【略図に近い】
6	樺太廳巡察駐在所平面圖	記載なし	〔平屋〕
7	〔敷香林務署〕野頃林務署新築工事	1/200	〔平屋, 平面圖〕
8	樺太廳森林主事駐在所新築工事圖	記載なし	〔平屋, 平面圖〕
9	中央試験所恵須取農事試験支所廳舎其他新築工事	1/200	倉庫/取糞舎/中央試験所農事試験支所廳舎/耕馬舎/水肥舎(平面圖, 断面圖)
10	豊原中学校配置圖	1/300	〔在来建物〕/〔増築計劃中〕/〔本年度増築〕區別あり,「昭和拾年度増築」範囲図示
11	豊原高等女学校配置	1/600	〔昭和拾年度増築〕範囲図示
12	整理圖 大泊医院レントゲン室増築工事	1/200	〔平屋, 平面圖〕, 大泊医院配置圖 (1/600) 含む
13	樺太廳博物館新築工事 配置圖	1/500	地階平面/貳階平面 含む, 樺太廳土木課(設計 貝塚, 製圖 美馬, 写圖 秋本, 校閲 石井)
14	樺太廳博物館新築工事 立面圖	1/100	正面/側面/背面, 樺太廳土木課(設計 貝塚, 製圖 貝塚, 寫圖 美馬, 校閲 石井)
15	樺太廳博物館新築工事 地階平面圖	1/100	樺太廳土木課(設計 貝塚, 製圖 金子, 寫圖 根岸, 校閲 石井)
16	樺太廳博物館新築工事 一階平面圖	1/100	樺太廳土木課(設計 貝塚, 製圖 金子, 寫圖 美馬, 校閲 石井)
17	樺太廳博物館新築工事 二階平面圖	1/100	樺太廳土木課(設計 貝塚, 製圖 金子, 寫圖 美馬, 校閲 石井)
18	樺太廳博物館新築工事 塔屋平面圖及全屋根伏圖	1/100	樺太廳土木課(設計 貝塚, 製圖 菅原, 寫圖 美馬, 校閲 石井)
19	官舎新営計画	1/200	甲官舎(部長官舎/課長官舎/農事試験支所長官舎)/乙官舎(四五坪/四一坪/敷香林務署野頃出張所長官舎)(全て平屋, 平面圖)
20	材料試験室新築計畫圖	1/200	〔平屋, 平面圖〕
21	茅蘭泊淡水魚孵化場配置圖	1/1,000	
22	樺太廳々舎階下平面圖	1/300	〔昭和拾年度修繕〕/〔昭和拾年度修繕〕範囲図示
23	樺太廳々舎階上平面圖	1/300	〔昭和拾年度修繕〕/〔昭和拾年度修繕〕範囲図示
24	樺太廳眞岡医院病室増築其他工事整理圖	1/200	〔平屋, 平面圖〕〔昭和拾年度修繕〕/〔昭和拾年度修繕〕範囲図示
25	泊居警察署改築計畫圖	1/100	老階平面圖/式階平面圖【略図に近い】
26	眞岡煙草販賣所新築計畫圖	1/200	〔平屋, 平面圖〕
A 9 / 21 追加予算関係 昭和十年度／樺太庁東京出張所／1934～35(昭和9～10)年			
27	大泊港駅本屋災害之図	1/200	原因「大泊連絡待合所之畧 八枚ノ一」, 正面/背面/階上平面/左側面/右側面/階下平面/塔屋平面/基礎平面,「薄赤ハ側壁焼損ク処ヲ示ス」/「濃赤ハ焼失崩壊ク処ヲ示ス」範囲図示, ※1
28	大泊連絡待合所之畧 八枚ノ一	1/200	〔図面そのものは※1と同じ〕
29	大泊港平面圖	記載なし	※2
30	〔大泊港平面圖〕	記載なし	〔図面そのものは※2と同じ〕
31	大泊港驛第一待合所本屋災害復旧之圖	1/200	正面/階上平面/三階平面【放熱器, 通信設備, 電燈の位置などの書き込みあり】※3
32	大泊港驛第一待合所本屋災害復旧之圖	1/200	図面そのものは※3と同じ【放熱器の位置などの書き込みなし】
A 9 / 37 予算資料 殖産部、中試 昭和十四年度／樺太庁／1937～38(昭和12～13)年			
33	農家住宅ノ設計圖	1/100	〔4種の住宅の立面/平面/断面(2種)/パース〕
A 9 / 52 歳出予算資料〔(-)〕 昭和十五年度／樺太庁／1938～39(昭和13～14)年			
34	大泊港埠頭陸上設備設計圖		横断面圖 (1/200)/平面圖 (1/1000)〔土木施設の図面〕
35	農村部落集會場計畫圖	記載なし	正面圖/側面圖/平面圖/小屋裏
36	農家指定住宅計畫圖	記載なし	正面圖/平面圖
37	開拓者共同宿泊所計畫圖	1/100	正面圖/平面圖
A 9 / 55 第二予備金関係 昭和十四年五月／樺太庁／1939(昭和14)年			
38	大泊港駅配置圖	1/1000	「道末バラスト沈下」/「建物被害」範囲図示〔土木施設の図面〕
A 9 / 57 予算資料 交通部 昭和十四年度／樺太庁／1937～38(昭和12～13)年			
39	〔豊原飛行場配置圖〕	記載なし	「民有地」/「滑走路」/「擴張地域」/「湿地」範囲図示
A 9 / 80 追加予算 〔昭和十六・十七年度〕／樺太庁／1941(昭和16)年			
40	樺太廳豊養園計畫圖	1/600	貳階平面圖/老階平面圖,「現在建物」/「昭和拾七年度実施建物」範囲図示
A 9 / 97 予算資料 昭和十七年度／樺太庁／1941(昭和16)年度			
41	樺太糧穀會社倉庫新築設計圖		正面/側面/小屋伏/平面(以上, 1/100)/横断詳細 (1/20)
42	〔樺太糧穀會社倉庫新築設計圖〕	記載なし	〔正面〕/〔側面〕/〔小屋伏〕/〔平面〕
A 9 / 111 第二予備金・剰余金関係 昭和十七年度／樺太庁／1942(昭和17)年			
43	樺太廳々舎配置圖	1/600	「焼失建物」/「移轉建物」/「廢毀建物」範囲図示
44	〔樺太廳々舎 貳階平面 老階平面 地階平面〕	記載なし	貳階平面/老階平面/地階平面,「第一回分」/「第二回分」範囲図示
45	樺太廳々舎階下平面圖	1/200	〔略図に近い〕
46	樺太廳々舎階上平面圖	1/200	〔略図に近い〕
47	樺太廳々舎配置圖	記載なし	「焼失セル建物」/「取除キヤ要スル建物」/「残スベキ建物」範囲図示
48	半田警部補派出所建物配置圖	1/300	「焼失区域」範囲図示
49	樺太廳師範學校女子寄宿舎配置圖	記載なし	北寮階上圖/北寮階下圖/階下圖/南寮階下圖/南寮階上圖,「赤輪郭ハ焼失部分」範囲図示
50	師範學校女子寄宿舎配置圖	1/200	老階平面圖/貳階平面圖,「焼失部分」/「昭和十四年度施行」/「昭和十五年度施行」範囲図示, ※4
51	師範學校計畫圖	1/600	女子寄宿舎老階平面/女子寄宿舎貳階平面/男子寄宿舎老階平面/男子寄宿舎貳階平面/師範學校老階平面/師範學校貳階平面/附属国民學校老階平面/附属国民學校貳階平面,「焼失」/「昭和十七年度」/「昭和十八年度」範囲図示, ※5
A 9 / 114 第二予備金・剰余金支出関係 昭和十七年度／樺太庁／1942(昭和17)年			
52	師範學校計畫圖	1/600	※5と同じ
53	〔樺太廳〕師範學校女子寄宿舎配置圖	記載なし	※4とほぼ同じ
A 9 / 132 編成関係 昭和十八年度／樺太庁／1942～43(昭和17～18)年			
54	樺太廳醫學專門學校新築計畫圖	1/600	校舎貳階平面/校舎老階平面
55	〔寄宿舎平面計畫圖〕	記載なし	老階平面(2種)/老階平面(2種)
56	樺太廳醫學專門學校計畫圖	1/600	老階平面圖
57	樺太廳醫學專門學校計畫圖	1/600	貳階平面圖

注) □内は筆者らによる推測や補足であり、内容欄の「」は図面中に書き込まれた内容を引用したことを示す。

3) 現地調査による確認作業

2019年8月1日～5日までの日程で、ロシア連邦サハリン州を訪問した。訪問した都市は、戦前期の樺太の南部に位置する6都市である。2日に、コルサコフ（旧 大泊）とドリンスク（旧 落合）、3日にホルムスク（旧 真岡）とアニワ（旧 留多加）、4日にネベリスク（旧 北斗）とユジノサハリンスク（旧 豊原）、5日に再度ユジノサハリンスク（旧 豊原）を対象に現地調査を実施した。

現地調査では、北海道立文書館所蔵の樺太庁文書に含まれている都市地図をはじめ、これまでに入手できた大縮尺都市地図と現況を比較できた。未だ詳細に分析できてはいないが、これら6都市については、その形成過程の検討のための糸口を見出すことができた。例えば、西海岸に位置して海岸に沿って南北に市街地が広がっていた真岡（現 ホルムスク）では、当初マウカ支庁が建設されて現在でも街の中心部である谷の部分と一段目の段丘面に、明治期に市街地が建設された。その後、大正期に二段目の段丘面の北側、昭和期に二段目の段丘面の南側の開発が進んだ。現地調査の結果、市街地の発展に、地形が与えた影響が大きかったことを改めて実感できた。実際の地形は、地図の情報だけではわからないことも多く、現地調査で得られた情報を今後の検討に役立てたい。

また、ユジノサハリンスクでは、旧樺太庁本庁の新庁舎についても検討できた。これについては、次の4)で詳述する。

4) 樺太庁本庁の新庁舎に関する検討

現地調査の結果を踏まえ、建築物に関する図面の整理を先行させ、そのうちでも、樺太庁本庁庁舎の図面を取り上げ、詳細を検討した。

①昭和17年2月の火災発生前の樺太庁本庁庁舎

樺太庁文書の簿冊に綴じ込まれた文書から、樺太庁本庁庁舎は、昭和17年2月の火災によって本館木造部分が焼失したことが判明した。その際の焼失範囲が、樺太庁文書に含まれる図面に示されている（表1中の図面47である図1の赤線で囲われた部分）。また、火災直後の様子を写し込んだ白黒写真8葉も確認することができた。これまで樺太庁本庁庁舎として同時代の写真などで知られていた建築物は、明治40年4月に新築された本館木造部分で、図1中の「本館1階」と「本館2階」にあたる。さらに、昭和9年に貝塚良雄の設計で新設された会議室として知られていたRC造の建築物は、図1中の「本館新館」にあたる。図1からは、昭和17年2月には、本館木造部分と本館新館のほかに、本館別館、別館、新庁舎と仮庁舎を含む新館、さらに独立した幾棟かの建築物もあったことがわかった。これらの建築物の存在は、管見の限り、これまで知られていなかった情報である。さらに、図1からは、樺太庁本庁庁舎内部の各部屋の用途も判明した。樺太庁文書の簿冊に綴じ込まれた文書や図面からは、明治40年に本館木造部分が建設された後の30年以上の間に、樺太庁の業務量と職員数が増加し、次々に新しい庁舎を建設した様子が窺える。

なお、戦前期の樺太の主要新聞であった樺太日日新聞は、現在、昭和17年1月までの所蔵しか確認されていない。そのため、樺太日日新聞の記事では、樺太庁本庁庁舎の火災については知ることができない。この点からも、樺太庁文書の有用性が再確認できる。

②火災後に計画された樺太庁本庁の新庁舎と現存する建築物との関係

樺太庁文書に含まれる図面（表1中の図43である図2）に、昭和17年2月に焼失した樺太庁本庁庁舎の代替として計画された新庁舎の位置が示されている。設計者は貝塚良雄

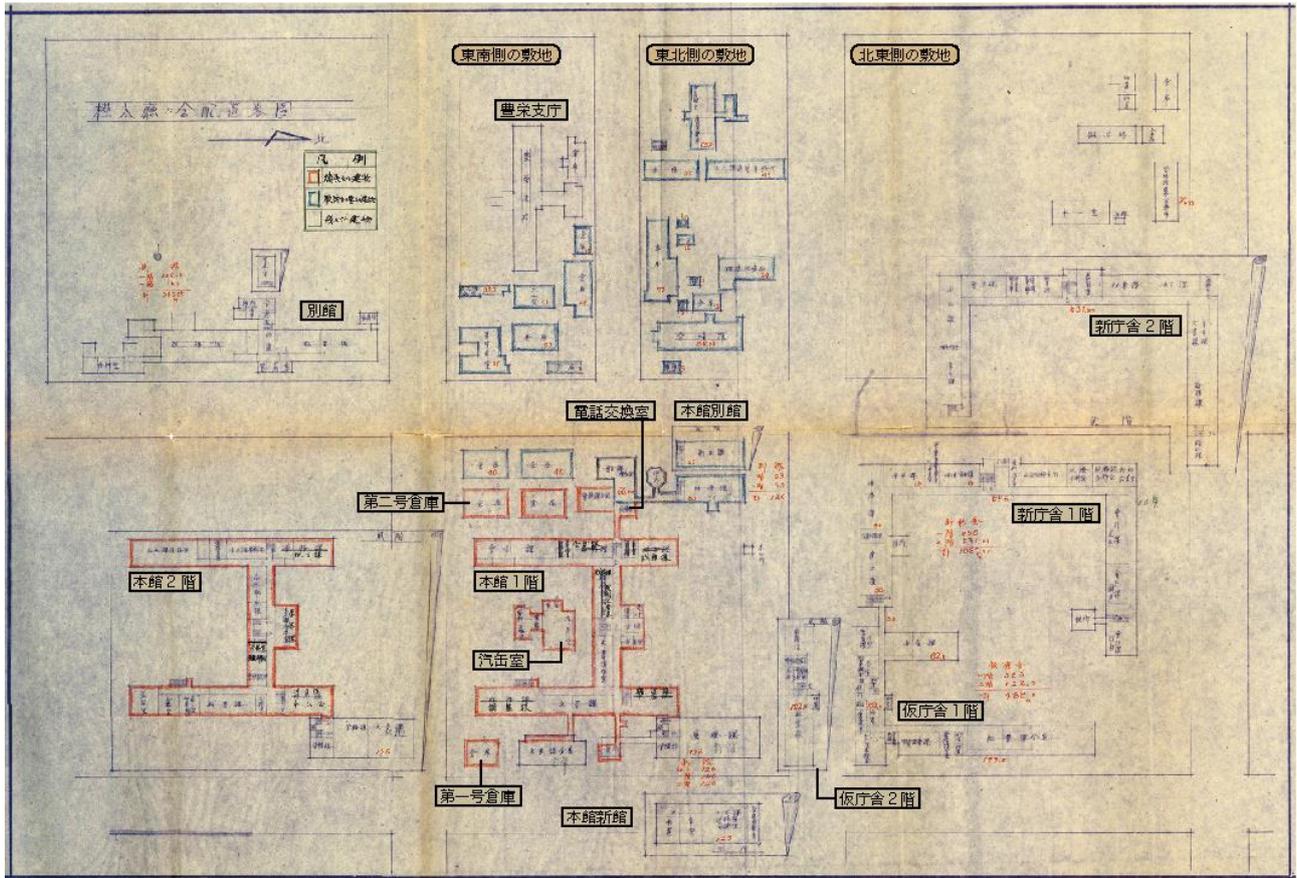


図1 昭和17年2月の火災前の樺太庁庁舎の配置
(表1中の図47, 一部加筆, 北海道立文書館所蔵)

で、第一期分が昭和20年5月に竣工した⁵⁾。さらに、本報告書では紙幅の関係から掲載していないが、表1中の図面44は、その平面図である。表1中の図面44からは、当初計画のうち、大蔵省の査定によって減じられた個所も判明する。結局、図2の両翼の先端部分と中央の主屋の2階、さらに西翼も減じられ、主屋の地階と1階、先端部分を除く東翼の地階から2階部分が、第一期分として建設されたと考えられる。

図2に示された新庁舎の位置には、軍関係施設が入っているとされる建築物が現存している。そのため、現地調査の際には、敷地内への立ち入りはできなかった。しかし、敷地外からの観察では、第一期分として建設されたと考えられる図2の東翼と主屋にあたる部分が確認できた。さらに、Google

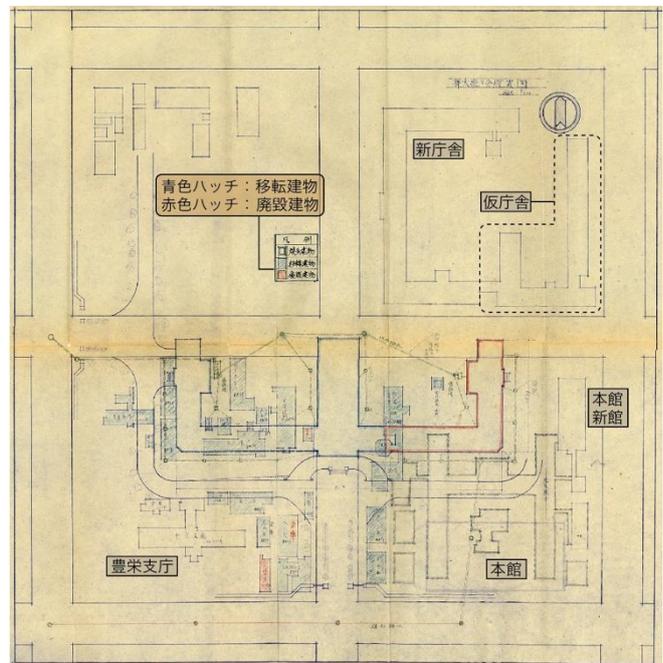


図2 新庁舎の建設位置(表1中の図43, 一部加筆, 北海道立文書館所蔵)

Maps, Yandex Maps ならびに 2GIS で提供される現在の空中写真上の建築物概形と敷地内での建築物の位置は、図43の建築物概形と建築物の位置とよく一致していることも確

認できた。なお、西翼が建設されなかった理由は、現地での観察から西翼の敷地が主屋と東翼の敷地よりも一段低かったことや図 2 から西翼の方が焼失を免れた「移転建物」が多かったことなどが考えられる。

これまでは、樺太庁本庁の新庁舎が建設された位置だけではなく、新庁舎の形態や平面などの詳細は全く明らかになっていなかった。しかし、現地調査の結果と、樺太庁文書に含まれる図面や書類などから、断定はできないものの、火災後に計画された樺太庁本庁の新庁舎が現存している可能性が非常に高いと考えられた。

5) 今後の課題

本研究を進める過程で、さらに一歩進め、戦前期の樺太の大縮尺都市地図について、より網羅的に調査を行って全容を明らかにすることを考えた。そのために、2020年3月に、北海道の札幌、小樽、稚内などの図書館や資料館を訪問して、各館の所蔵状況を確認することを計画した。しかし、新型コロナウイルス感染症の影響で、北海道での調査はキャンセルせざるを得なかった。今後の課題としたい。

また、建築物に関しては、樺太庁本庁庁舎に関して、多くの新たな知見を得ることができた。しかし、戦前期の樺太の諸都市が建設された過程とその後の変容については、大縮尺都市地図の収集と整理に時間がかかったこともあり、十分には検討できなかった。さらに、都市の建設時に必要不可欠であった測量技術者の活動についても検討できなかった。これらも今後の課題としたい。

(発 表 論 文)

- ・辻原万規彦，角哲：北海道立文書館所蔵樺太庁文書所収の図面類と樺太庁本庁庁舎，日本建築学会技術報告集，A4判6ページ，2020.2投稿（現在査読中）
 - ・辻原万規彦，角哲：北海道立文書館所蔵樺太庁文書所収の図面類について，日本建築学会九州支部研究報告，第59号・3〔計画系〕，pp.637～640，2020.3
- ※『日比谷カレッジ 企画展示関連講座 古書で紐解く近現代史セミナー 第35回』（2019.11.27，千代田区立日比谷図書文化館4階スタジオプラス（小ホール））で、「戦前期の樺太の街はいかにして建設されたのか」をテーマに研究成果の一部を講演した。

参考文献

- 1) 鈴江英一：樺太庁文書，日本古文書学講座 第9巻 近代編 I（三上昭美ほか編），雄山閣出版，pp.247-249，1979.12
- 2) 北海道総務部行政資料室編：樺太関係文献目録，北海道，1970.3
- 3) 竹内桂：国立サハリン州文書館所蔵樺太庁豊原警察署文書に関する若干の考察，国文学研究資料館紀要 アーカイブズ研究篇，第2号，pp.135-143，2006.3
- 4) 井潤裕：サハリン州公文書館の日本語文書，アジア経済，第44巻，第7号，pp.59-75，2003.7
- 5) 井潤裕：ユーラシア・ブックレット No.108 サハリンの中の日本 都市と建築，東洋書店，2007.6